

第1回サンティアゴ巡礼【下】

(2016年5月19日～5月30日)

5月19日(木)

四時ごろ目が覚めてしまったのでいつもより早い出発支度である。何せ個室だものなあ♥ 早朝からでも落ちて荷物整理ができる。朝食はドーナツと家から持参のプルーン(ここで食べきった)とココアとミルク。

七時前に外に出ると、何だ、雨じゃないか!いやだなあ・・・でもレインコートを着るとすぐ止む、また脱ぐと降るということを繰り返す。

サリアからの道はけっこうきつい。楽なところも少しはあるが。それと特筆すべきは昨日ポンフェラーダまでに見てきた周囲の家々の様子とこのあたりの家々の様子がかかなり違ってきていることだ。現代的なコンクリートの家が増えてくるのはあまり楽しくない。

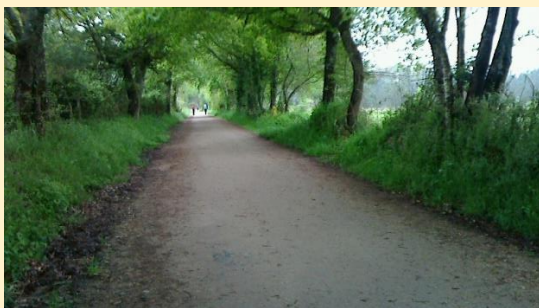


特急列車も通るのに単線・・・



なんとなく曇りや雨の日が多いようなガリシア地方

ボールなどはなかなかなかったが九時半ごろだったろうか、店があったのでカフェ・コン・レチェを頼んで1.1€。それからボールペンのインキが切れたので雑貨と土産物の店でボールペンを見つけて1.5€。それから昼過ぎに派手なディスプレイの店でトマトとリンゴとキャンディを買って2.5€だった。一番目の店と三番目の店でスタンプをもらった。



こんな感じの道も多かった気がする



ロバにもよく出会った・・・



牛にもよく出会った・・・



日本の牛とはかなり雰囲気が違う

それにしても荷物が重い。少しは減っているはずなのに全然軽くなった気がしない。休み休み行くしかない。ポルトマリンの町に入りやっとアルベルゲを見つける。もうほとんど十六時。ハードだった～。サリアから23kmらしい。町に入る時大きな橋を渡った。これがものすごく怖かった。長いし、水面は遥か下である。ずーっと首がぐらぐらしているので小川にかかる手すりのない橋を渡る時いつも怖かったがこの大きな橋も手すりがとても簡単で隙間だらけ！子供だの物だのすぐに落ちこちて一巻の終わりになりそう。（そういえばアルベルゲのベッドの手すりもいつもあってなきが如しである。何故だろう？）

ここのアルベルゲは短いけれどもものすごく急な坂の上にあった。食事はつかず自炊設備ありで12€だった。部屋はとても感じが良く、ベッドは下段を使うことができてばすぐにもバスタブ付きでとてもきれいだったが使う人によっては床をびしょびしょにするので困った。尤もこのことはどこのアルベルゲでも同じである。キッチンではIHコンロの使い方がわからず電子レンジだけを使った。これまでのアルベルゲでもガスコンロの火が点けにくいことが多かった。

午後七時ごろだったがキッチンに行ったらだれもいなかったのできつとみんな外に食べに行ったのだなと考えた。私はもう外を出歩く気力はなかったし、少し節約もしたかったのでこの日は乏しい食料を駆使してしのいだ。

5月20日（金）

朝何も食べずに出発したらなかなか店に行き会わず、相変わらず荷物はハードで山道は続く。九時半を過ぎてからようやく出会った店は飲み物だけで、食べ物をほとんど置いていなかった。それでカフェ・コン・レチェの他に小さいカップケーキ二個を買う。それしかなかったのだ。合わせて1.5€。そして十一時半ごろ出会った店でサンドイッチを作ってもらう。3.3€。オレンジが一個ついてきた。でも包みがとっても大きくて重い。次に店があったら食事だ、と心に決めて頑張り続ける。

12:50ごろ三軒目の店に遭遇。ファンタのような缶入りオレンジジュースを1.6€で買って外のテーブルに着きさっきのサンドイッチと合わせて食事をする。見ればどうやらここはアルベルゲもやっている。予定の目的地にはまだ3kmくらい足りないかもしれないがここで泊まることにしようかとサンドイッチを食べながら考える。それは大きなトルティージャとトマトの輪切りが四枚、大きなフランスパンに挟まっているボガディー

ヨだった。重いわけだ。そして食べているうちに午後一時も過ぎたしやはりここで泊まることにする。バテるまで歩くことはない。列車などを使ったせいで日数にもかなり余裕ができてしまっているし。

ベッド代は10€だった。とてもいい部屋だ。二段ベッドが六台あるが。シャワーも星二つのホテルにありそうなくらいのもので昨夜のところもそんな感じだった。でも共同で使うと廊下の床までびしょびしょにしたままにする人がいるから閉口する。自分が早く宿に入ってゆっくりしていても後から大勢入ってくることもあるし。

二段ベッドの下段を使った。まだ時間が早かったので選び放題である。上段のボードの裏にタオルや靴下を干すのに丁度いいワイヤーや釘があった。でも後から気が付いたが庭に干している人もいた。ああいうこともできたんだ。でもまあいいや。家にメールをして聞いてみてわかる。5日にパンプローナから送った荷物は一週間ほど前に着いていたそう。何だ、教えてくれればいいのに。

ディナーは9€。マカロニ料理とペスカード（魚料理を全てそういうらしい）を選び、デザートはヨーグルトにした。料理には大量のフライドポテトがついてくることが多いがここでもついていた。ヨーグルトさえも量が多く食べるのが大変である。魚は白身魚のムニエルだった。メルルーサかな？でもこれも巨大である。やっぱり食べきれずに残した。

ところでこの地名は何というのだろうか？ペンタス・デ・ナロンかな？

5月21日（土）

朝も昼も昨日の超特大ボガディージョの残りを食べる。八時過ぎごろバールでカフェ・コン・レチェ1.25€。昼過ぎごろ次のバールでオレンジジュース1€。

トイレだけ借りようとしたお客に店のおじさんが腹をたてていたので私もトイレを借りそびれた。1€のジュースだけで室内のテーブルについて弁当を食べているんだものな。でも他に客がいなかったんだしわざわざ外で、というのも変じゃないかと・・・。



巡礼のマスコットキャラクター、シャコベオ



この地方独特のオレオと呼ばれる穀物倉庫



墓地かな・・・？



オレオは高床式倉庫

レインコートを工夫して荷物が下がってこないような支えにしてみた。しばらくは快適だったがでもやはり完璧ではなかった。後半は元通りになる。

午後一時ごろから宿探しを始めるがなかなか見つからず。いろいろありそうに見える市街地であちこち当たったのだが予約がないとダメとか満員だとかでみんな断られる。26km歩いてメリーデまで行く人はかなり多いだろうが私はそんなつもりは全くなかった。なのにやむなくメリーデまで歩く羽目になる。もう16:50になり疲労困憊であった。メリーデの町でようやくアルベルゲに入れた時には疲れすぎて口が動かさずうまく喋れなかったくらいであった。

バールの二階がアルベルゲになっていた。ベッド代10€、洗濯機使用3.5€。洗濯の途中で機械が動かなくなりバールに駆け込んで人を呼んできて助けてもらう。

相客の中に日本人女性がいた。でもあまりよく喋るタイプの人ではなさそうだったのでほとんど話はしなかった。だから一人だけ日本人だったのか二人くらいいたのかよくわからない。

夕食は下のバールでピザ・マルゲリータとコーラを頼んで6€。ピザは「本場ナポリ風ピッツァ」みたいなのではなくどちらかというとなアメリカンな感じのピザだったがそれなりに美味しく量も手頃だった。



ピザ・マルゲリータ。サイズは日本の一人前くらい。

メリーデに入る少し前に顔見知りの韓国人男性で多分四十代くらいで長身の人が出たのだがその人に突然出会った。その人は数日前に私が59歳の韓国人女性と一緒に歩いていた時に抜きつ抜かれつしていた。彼女とは知り合いのようだった。その彼は、聞けば私がポンフェラーダからサリアまで100km近くも列車に乗って稼いできたというのにその間ずっと歩いてきて今私と同じ地点にいるというわけである。速い！信じられない！

さて私が夕食をとりに入ったバールでは女子中高生（ハイティーンかローティーンかわからない）が大騒ぎをしていた。夜八時ごろである。といっても外はまだ明るいのだが。彼女たちがグラスをひっくり返しても店のスタッフは顔をしかめるだけで特に注意などしない。「若いモンはしょうがないなあ」くらいに考えている感じである。

その晩はサタデナイトのせいか店の外の通りで若者たちが夜通し騒ぐ声がした。朝六時頃まで、いや、もっと後までだ。前に本で読んだことがある。朝まで飲み明かした酔っ払いの若者たちが朝出発するカミーノたちをからかって遊ぶという話だ。まさにその通りの光景だった。

5月22日（日）

酔っ払いの若者たちを避けながら出発。九時過ぎ、あるバールで間違えてパスタサラダ（5€）と野菜スープ（3€）を頼んでしまい面倒くさいことになってしまった。日本人の感覚では朝食にこういうものを食べるのはちょっとおかしいことではないが、こちらではこういうものは朝っぱらから食べるものではないのでディナーの時のように大皿に盛られて出てくる。注文するとき怪訝な顔をされて不安になって一瞬マズかったかな？と思ったが取り消すのもためらってしまった。やっぱりやめればよかった。

広い庭に並べられたテーブルについていたので他のお客さんたちとはそんなに接近していないのだが、なるべく目立たないようにと念じながらやっとなんか半分以上を胃袋に収めあとはこっそりタッパーに移してテイクアウト。そしてその後昼食として道端のベンチで休みながら食べた。豪華なお弁当を道行くカミーノたちに見せびらかすことになった。「ボナペティ！」（おいしそうだね）と笑われた。

ところで何をどうやっても首への負担はなくなる。サンティアゴ到着は25日を予定しているがあと45kmくらいである。一日15km以上歩けば大丈夫なわけだがしんどいな、と思う。

13:00、アルスーアという町で泊まることにする。あとのこり38・9kmだ。空身だったら一日で歩ける

距離なんだけどな。明日はどこまで行こうか・・・？何？オ・ペドロウソまでアルベルゲがないって？ここから19kmだ。行けなくはないけど・・・。

ここのアルベルゲはとていい。造りがちょっと前夜のメリーデのアルベルゲに似ている。隣がバールだ。アルベルゲ部分も一階なので階段の昇り降りはない。しかしベッドの上段の高さが低くて下段にいると座れない。寝ているしかない。そういう所は時々あったがここは特に低い。

シャワーを使うのは今日はやめた。部屋にはベッドの他に椅子がいくつも置いてあり、あまり混んでこなければ荷物の置き場として一人一個ずつ使える。他に帽子掛けの大きいのみみたいな形をしたハンガーがあるが、ベッドから離れていると不安である。よく日本人は荷物を置きっぱなしにしたまま平気でその場を離れる、と言われるが、私は日本にいたってそんな危ないことはする気になれない。人に荷物番を頼むということも極力しない。だからなのか、よく人に荷物番を頼まれる。自分のことをいつも自分でやる人は人のことまでやらされがちである。だから私は子供と出かけたりするのが嫌だ。・・・つい話が逸れてしまった。申し訳ない。話を戻せば帽子掛けのようなハンガー、そこの他に細かい洗濯物を引っかけておく場所がなかったのでそこにかけてよく見張っていることにする。ああ、それにしても首が痛い！

隣のバールでディナー9€。ガリシア風スープ（キャベツがたくさん入っていた）とスパゲッティボローニャ風（要するにミートソースである）とアイスクリーム。これは市販のコーンアイスだった。



ガリシア風スープ



スパゲッティ・ボローニャ風



デザートのアイス。よく市販のアイスがそのまま出てくる。

そのアイスを食べていた時、太った老人男女二名ずつの四人組が店に入ってきて私の隣のテーブルに着こうとした。ところがあまり広くない場所だったのでその四名の巨体により彼らのテーブルの占有面積が急に拡大し、

私のテーブルが押され、私は避難しようにも身体が椅子とテーブルの間に挟まれて出られなくなってしまった。それでもやっとのことでその場所から抜け出し別の場所に移ってアイスを食べ終わり店から退散。でもその四人組の私に対する態度は「アラ悪いわね。ゴメンなさい♥」くらいの感じであった。私はスペインではほとんど肥満体の人を見なかった。(カミーノの中にはたまにいた。) 彼らは例外であった。

5月23日(月)

オ・ペドロウソはサンティアゴ・デ・コンポステーラから21kmのところ、とあったが私はこの日アルベルゲを探して「あと19km」のところまで来てしまった。14:40着。疲れた……。ベッド代10€のアルベルゲ。悪くはない。シャワーを浴び、衣類の汚れたのを全部洗濯する。全自動で4€。

この日は朝九時半頃までバールがなかった。でもやっとバールに行き当たって丸いフランスパンのサンドイッチを買う。チーズのとサラミのとをそれぞれ一個ずつ買って2€。超簡単なサンドイッチだ。簡単なものは安い。手間のかかっているものは高い。それだけの話。今日は20km歩いたわけだ。

夕食。あまり近くにバールがなく少し歩く。ちょっとした町だ。日本に例えると小田急線沿線の下北沢とか祖師ヶ谷大蔵とかそのくらいの感じだろうか。そしてやっと思つて入ってみた店のメニュー(日本で言う意味の。こっちで「メニュー」と言うと定食、ディナーセットのことである。)の値段が皆高い!しかも文字がデコラティブだし小さいし、まことに読みにくい。しかしそれでもやっと思つて8€のハンバーガーというのを見つけ出す。それとコカ・コーラ1.6€を頼んだ。それはとても豪華な粗挽き肉のハンバーグがこちらのパン一切れの上に載せられそれにフライドポテトが山盛りで添えられたプレートで、見ただけで歯が痛くなるような気がしたが口の中でカミカミ、というよりモミモミしながら一生懸命食べる。肉は赤身なのでそうハイカロリーではない。あとでお腹が空くからできるだけ食べたほうがいいと思ひ頑張って食べる。でも少し残す。

それからいつも必ずついてくる山盛りのパンかご。全部食べたってかまわないわけだからたくさん持ち帰ったっていいだろうとは思うが、やはりそれははしたないという気がして自分が食べかけた一切れだけこっそりテイクアウトした。



こちらのハンバーガーはこのような形らしい

5月24日(火)

昨日のサラミ入りのパンの残りやハンバーガーについてきたパンの残りや朝食。そしていつものように七時出発。そして途中バールでハムとチーズを挟んだ大きめの丸いパンを買う。3. 1€。

雨が降ってきた。次のバールで雨宿りがてらホットチョコレートを飲む。1. 5€。この日は昼頃までずっと小雨を浴びながらの道中だった。道はとてもいいのだが14kmがとても長く感じられた。十二時ちょうどにモンテ・ド・ゴソ(歓喜の丘)着。サンティアゴ・デ・コンポステーラまであと5kmの地点である。今日はここまでと決めている。最後まで行ってしまおう人たちもちろんいるが、ゴールの日は早い時間に到着して余裕をもってミサに参列したい。それにミサは昼からなので今から行ったら間に合うわけがない。



モンテ・ド・ゴソのオブジェ

十三時にアルベルゲが開くそうだがそれを待つ間に身体が冷えていく。朝買ったサンドイッチを半分食べる。ここのアルベルゲは八百人収容できるという巨大なもので、軍の兵舎か何かのように長いかまぼこ型の建物が連なっている。ベッド代は6€。食事は当然つかない。これだけ大きい施設だとその日によって何人泊まるかわからないわけだし食事作りのためのスタッフが常にスタンバイしているというのは無理だろう。

そこで驚いたことに、なんとあの韓国人のウナちゃん母子に再再会！しかもまた同室になる。でもなぜ？私は十五日の朝に二人と別れてから350kmくらい鉄道を使ったのに。あなたたち、あそこから500km以上を全部歩いてここまで来たなんてことはないよね？開くのを待っている間にウナちゃんに尋ねてみた。「全部完璧に歩いてきたの？おばさんはバスや電車に乗ったりしたよ。」

私の韓国語はあまりうまくないのでウナちゃんは「この人、何言ってるの？」という顔をしたが、大人は私の下手な言葉でもよく察してくれ、そばにいた同行の若い女性が通訳してくれた。「電車あ？」とウナちゃんは笑った。まさか！？いくら健脚だといつたって500kmを十日間で歩いてくるなんて不可能だろう？それに昼過ぎぐらいに宿に着かないと泊まれないかもしれないんだよ？ありえないだろう！

そのお姉さんなりウナちゃんのお母さんなりにちゃんと尋ねればよかったのだが私はそうする勇気がなかつ

た。疲れていると外国語ってうまく喋れなくなるのだ。そういう意味でちゃんと会話をする自信がなかった。

それと一つ小さなトラブルがあった。私はその母子とその若い女性の四人で同じ部屋だったのだが、私が一人で部屋で休んでいる時に一人の五十がらみの男性が部屋に入ってきて、自分はこの部屋なのだが、と言った。そんなはずはない、何かの間違いだろう。しかし私はオタオタして焦りまくった。その男性はスペイン人らしく、「自分は英語はわからない」と堂々と言うタイプだった。その時韓国人の三名はキッチンで夕食の支度をしていた。韓国の方々日本人や欧米人のように忙しければ食事はテキトーで、などとは考えないらしい。どんな場合でもちゃんとした食事を用意して食べることを良しとする。しかもグループ行動が得意だ。カミーノの世界でもよく知られたことのようなのである。

私は「ちょっと待って下さい」と言いおいてキッチンに走った。そしてウナちゃんのお母さんと呼んだ。しかし英語さえちゃんと喋れず「違う人が部屋に来た」と言うだけで精いっぱいだった。しかし彼女はすぐに理解して「わかりました。私が対応します。」と言って駆けつけてくれた。

しかし彼女はその男性に対してそんなに難しいことを言ったわけではなかった。

「ここは私たちの部屋です。これは私と娘のベッドです。それからそっちはオンニのベッドです！」それだけを繰り返した。そうか、それだけでいいんだ！ただ一つだけ理解できないことがあった。「オンニ」というのは韓国語で女性が自分の姉や少し年上の親しい女性をさして言う言葉で呼びかけにも使う。しかし英語ではない。あの若い女性はウナちゃんの実姉とは思えない。二十代後半ぐらいに見えたしお母さんは三十代前半ぐらいに見える。もしも若い女性がウナちゃんの実姉でお母さんの娘だとしても「オンニ」という表現には決してならない。あ、もしかしてあの若い女性のほうがお母さんより年上？それならありえない話ではないか・・・(と、だいぶ後になってから考え付いた。)それはさておき、結局彼女はオスピタレイラさんと呼んできて解決してもらった。まったく、使える外国語を身に着けるためにはいろいろな実体験が必要だなあと考えたことであつた。

夫と電話で話す。入院している義母のことなど。

夕食は近くに店がないのでちょっと遠くまで食べに行った。来た道を二十分くらい戻ったところにある商店街に行ったのである。フィデウオ（5月4日の項参照）の入ったスープ、チキンの胸肉を焼いたのといつものフライドポテト。水は330ml入りだった。（普通の人にはワインを頼むのであるが私は外でアルコールを飲むと気分が悪くなることがあるのでいつも水かソフトドリンクである。）デザートはアイスクリームケーキも巨大だということもなく美味しくいただけた。それとティー、あれは何のお茶だったのだろうか？ちょっと緑茶っぽかった。全部で9€。

帰り道にちょっと迷う。通りすがりの人に道を尋ねて戻る。

今日は午後雨も降ったり止んだり。傘を持って行ってよかった。小さい折り畳み傘がわりと役に立つ。傘をさして歩けるほど良い道なのだ。荷物が少なかつたらどんなに楽だっただろう。

帰ってきたら夜の十時近く。ようやくこのころ暗くなる。室内がとても暑い。毛布はないけど大丈夫だな・・・あ、今日も野菜らしいものを全然食べていない。

5月25日（水）

朝七時過ぎに出発した。あと5kmとはいえ楽ではなかった。八時三十分頃サンティアゴ・デ・コンポステーラのカテドラルの近くまで着いていたのだがその後迷いに迷って汗だく。登り下りの坂や階段がとても多い。

九時三十分、ようやく巡礼事務所に到着する。四十分並んで待つようやく証明書を手にする。発行代3€と筒代2€。

列に並んでいる時見覚えのある女性と出会い、無事にゴールしたことを喜んでくれた。しかし申し訳ないことにいつどこで会った人なのか覚えていないのである。韓国人やアジア系の人ならいつどこで会ったのか覚えていられるのだが、欧米人の場合だと全体の人数が多すぎるせいだろう、よほど特徴のある人でないと記憶がみなごっちゃになってしまうのだ。向こうは私のことをはっきり覚えていてくれるので（特別目立っていたからな）心苦しい。

かなり強く雨が降り出す。早く宿を見つけて休みたい。ミサなどどうでもいい気分。とりあえずバールを見つけて休む。有名なものだからぜひ食すべしと噂に高いサンティアゴケーキとコーヒーとオレンジジュースのセットというのがあり3・5€。雨が止むまで店内にいられてよかった。



ケーキとコーヒーとオレンジジュースの組み合わせはなかなかいい感じ。

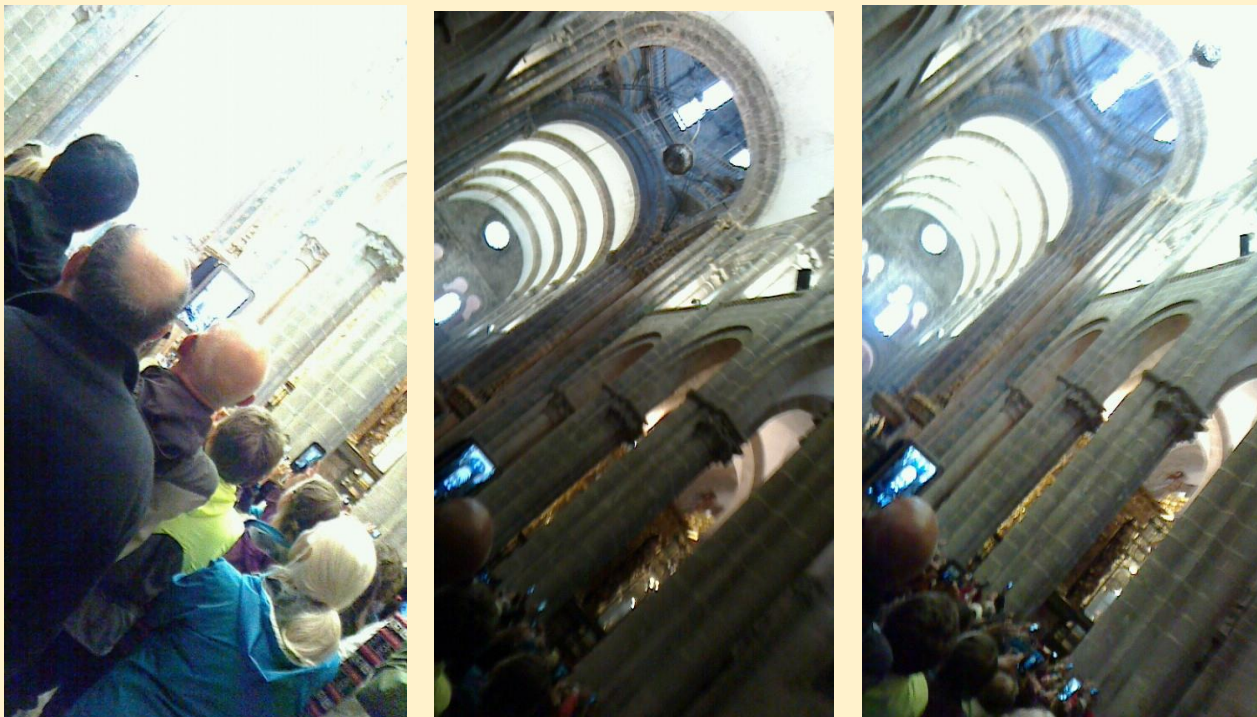
その後ミサに向かう。広場に集まっている人々が移動していたので場所はわかりやすかった。聖堂内の後ろの方の大きな柱の元に座り込んで十一時二十五分からずーっと待っている。また降ってきた雨に濡れなくなっただけでありがたい。座れるだけでありがたい。

老人の方々たくさん、カミーノがたくさん、学生の団体も大勢いた。美声の女性による歌唱指導のようなものがあり、知らない聖歌だが声を合わせて歌う。そのあとはお祈りなのか説教なのかよく聞き分けられなかったがいろいろな単語がけっこう聞き取れる。セニョール（主よ）とか、イエルサレムとかマリアとかポルケ（なぜな

ら)とか。でも巡礼者の名前を読み上げるというのはなかったような・・・。

献金集めがいきなり来たので焦った。いくら入れたかはっきり確認していないが0・7€だったかな？

ポフタメイロ（香炉振り）が行われた。これはいつも必ず行われるというものではなく特別な寄付のあった時だけとか聞いていた。中高生らしい団体がいたということは学校側からそれなりの寄付があったということだろうか？ともあれ貴重なものを拝見することができてラッキーであった。皆スマホで写真撮影をしている。私もケータイで一生懸命トライしたがあまりうまく写せなかった。



ポフタメイロを見上げる礼拝の参列者たち

そのあと宿探しをする。まずホテルに、次にペンションに断られる。予約がないのでダメ、200€の部屋ならあるけど・・・って、バカにしてるな、高級ホテルだからって。ペンションの方はコンプリートでダメだった。しかし三軒目のアルベルゲでベッドを確保。16€で四人部屋。シャワーもバスタブつきでベッドには掛布団もある。嬉しいけど部屋が男女別だったらもっとよかったな。(相客は若い女性一人とおじさん二人)ともかく荷物の整理。捨てられるものはどんどん捨てる。

五時ごろ夕食を買いに行く。土産物屋ものぞく。日本の観光地並みに土産物屋が軒を連ねている。しかしかわいなものもある。銀粉と銀色の衣装をまとった聖人姿の人が立っていたり物乞いがいたり。

そういえば巡礼事務所を探している時、変なオッサンにナンパされたようだった。彼もカミーノみたいだったがスペイン訛りの英語を使ってコーヒー一杯とかなんとか言ってくる。何だか知らんがあんたなんかホイホイついていく女がいると思っているのか。

土産物屋でこれから帰国までに必要となる貴重品入れのバッグを探して買う。何しろ日本に送り返してしまったからなあ、流石にこれからはそういうものがないと不便なのだ。それから娘へのお土産に丁度いいキティのカ

ミーノバージョンの絵のついたピンクのナップザックも買う。合計18.5€。

それから食料。パールでサーモンとツナのカナッペのようなものをそれぞれ一個ずつと一口大のクロケッタ二個で計4.5€。それらに合わせて食料品店で安いパンと缶入りのコーラを買う。1.65€。この買い物で0.05€の小銭をうまく使うことができた。こちらは少額コインの種類が多くて大変である。

それにしても夜になっても外は賑やかというのか煩いというのか……。まるでメリーデの時のようだった。(5月21日参照)

明日から明後日にかけては「地の果て」と言われるフィステーラという海岸まで行ってみようと考えている。日数が二日余ってしまったのだ。予約してあるマドリード行きの夜行列車は27日の夜出発するのだ。



アルベルゲの部屋のベランダで夕食

5月26日(木)

朝八時前にフィステーラに行くためのバス停だというあたりに着いて待っていたら他のカミーノたちも来て乗り場がよくわからなくて皆でウロウロする。そして地元の若い女性が教えてくれたところによると、前売り券を買っていないと九時のバスにはのれないのだそうだ。今日の前売りは十時からカテドラルで。それを買えば午後四時のバスに乗れるとのこと。うわー、面倒くさい。冗談じゃない。・・・途方にくれたがとりあえず下見の必要もあるのでサンティアゴの鉄道駅に行って今後の身の振り方を考える。でも私以外のカミーノたちは皆前売り券を持っていた。つまり私はそういう情報を得にくいのだな。言葉が不自由だし。一人で来ているからということではなく周囲に同じ母国語を使う人たちが大勢いるかいないかの違いだ。

さてサンティアゴの駅はどういう感じかということ、日本ならば各駅停車しか停まらない駅くらいの規模の建物である。駅構内のカフェテリアでコーヒーとクロワッサンとオレンジジュースのセットを頼む。3.9€。そして駅構内にあった時刻表などを見ながら考えた末、大西洋岸を少し南に下ったところにあるビーゴという町に行ってみることにする。列車の本数もわりとあり、往復するのに便利だ。でも9:30の列車が、残念！ちょうど出るところだった。次は10:42。

サンティアゴ駅からビーゴ駅までの運賃は9.52€であった。そしてビーゴに着いた。ただ「ビーゴ・ヒサ」というのと「ビーゴ・ウルザイツ」という二つの行き先があるのはどういうことなのかわからなかったがその列車は「ビーゴ・ヒサ」の方に着いた。これは多分パリに東駅、とかモンパルナス駅、とかいろいろあるの

と同じことだろう。しかし地図上での位置関係がどうもよくわからないのでまた駅のカフェで考察とランチ。オリーブ入りのポテトサラダとオレンジジュースで5・9€。しかし地図といっても「スペイン」のガイドブックの中の「ビーゴ」のページの隅にある5センチ四方の大きさの地図があるだけである。それを見ながらもう一つのビーゴ駅を探して歩くがうまくいかずそのうち偶然見つけた二つ星ホテルに投宿。30€だった。



ビーゴの駅のカフェでランチ

久しぶりに残金を数える。アルベルゲなどでは人目もあるし照明は不十分だしそういうことをする気にはならない。750€と72セントあった。けっこう使ったなあ。あとこれから必要なのはサンティアゴに戻る電車賃9・52€と今晚と明日の分の食事代とマドリードでの二日分の食事代。マドリードでは日本料理の「どん底」という店に行ってみるつもりなのでそこで10€以上使うであろうからあとの食事代の合計を40€以内におさえ計50€。他にお土産代だがスーパーなどで安いものを探せば50～70€ですむかな。つまり100～120€くらい必要だということだ。

ホテルで荷物をほどいた後、外を少し歩いてみようと思って貴重品だけ持って出かけるが、ちょっと近くのスーパーに入ってみただけで首が痛くなってきたのでこりゃダメだと思い買い物だけして戻って休むことにする。スーパーでは18・72€の買い物、これから飛行機に乗るまでの三日間に食べるものと日本へのお土産の一部である。もう外食はできるだけ避けて節約しなくてはならない。

5月27日（金）

目が覚めたのは六時半すぎ。早くから外に出ても疲れるだけだから九時半まではいようと思ったが八時前から部屋の外が掃除の音か何かでうるさい。早く出ろっていうのか？などと勘ぐってしまう。

九時少し前にホテルを出た。せめてカストロ城とかいう名所に行ってみたくていろいろ歩いてみたがわからなかった。坂の多い町で、ずいぶん高いところまで登り、沢山歩いてしまった。12kgはあったであろうところにさらにお土産や食料品の追加された荷物を背負ってこんな所まで来て一体私は何をやっているんだと思いながら。海外に出ると日本のような便利なコインロッカーなどお目にかからないのである。



街中でも田舎でもよく見かけた巨大なゴミ箱。犯罪に使われる危険はないのだろうか？

二、三時間歩き回った挙句坂を下りてビーゴ・ヒサ駅の近くの海に見える公園まで戻ってきて十二時から四十五分間くらいベンチに腰掛けてランチタイムとする。そうしていたら身なりのいいおじさんが何かを勧誘しにやってきました。お金を出してくれということではないようだ。何かに参加するように勧めているようだった。でも何でまた私に？一目ですぐにどこかに行ってしまう外国人だとわかるだろうに！

また、犬を連れて散歩していた人から「サンティアゴに行ってきたんですか？」と声をかけられた。バッグを見たのだ。サンティアゴのロゴとカミーノの絵柄が入っていた。そしてとても人懐っこい大きな可愛い犬たちに纏わりつかれて幸せな気分になった。そして15:10にビーゴを発って16:42にサンティアゴに戻る。

20:27発コルーニャ行の電車を三時間四十分待つ。ここからが日本から予約で取ってきてある切符である。雨も降ったりしているし、荷物が大きいとどこを歩いたって楽しくないのでずっと駅にいた。そんなに大きな駅ではないがその時は乗降客が大勢いた。

初め座る場所がないのでカフェに入った。カフェの席はたくさん空いていた。すでに客の去ったテーブルで片づけるひまがないまま、みたいなところが多かったけど。そしてカウンターのショーケースに一切れ残っていたサンティアゴケーキと紅茶を頼む。小さなステンレスポットに熱湯、別にティーバッグという形で出てきた。お名残りにちょっと贅沢をした。でもこのカフェテリア、高いよな。4.5€だったもの。前日ビーゴで食事をした時もサラダとジュースで5.9€というのはちょっと高いと思った。

そのあとホームのベンチが空いたので座りに行った。前述したが（5月18日）こちらの駅は駅舎とホームの間がノーチェックで往来自由である。ホームには飲み物、お菓子、アイスなどの自販機の他に写真を撮る機械もあった。日本の証明写真を撮る機械のようなものであり、プリクラではない。それからびっくりしたのは避妊具の自販機があったことである。陳列してある商品の大きさから見て「何かしら、アイス？」と思って見に行ったら、アラアラ……。三十種類くらいの商品見本が陳列されていた。

余談だがスペインのお店の人たちはみな愛想が良くて親切である。町の人たちも大概そうなのだが、ただし英語で道を尋ねたりできる相手は十人に一人以下。中学生か高校生なら大丈夫だが、二十代だと三人に一人くらいになる。学校を卒業すると英語はみな忘れてしまうらしい。

欧米人たちは大変強くたくましい。日本人や韓国人はデリケートとも言えるがある意味ひ弱なんだと思う。欧米人は一般的に東アジアの人間よりも体格が良く骨格も筋肉もがっちりしている上に体温調節機能も優れているのではないかと思う。ぬるま湯が出てくるだけのシャワーを平気で浴びてそのあと水着みたいな恰好でうろついたりするし、ちょっと寒い時も半袖のTシャツで平気だし、逆に歩いていて暑くなっても歩き始める前の服装のままで平気だったりする。私だと着たり脱いだり忙しくて仕方がないがそういう体力の強さも装備の衣服を少なくできる要素かと思う。

また、悪く言うと鈍感ということになるが彼らは細かいことを気にしない。わざとでなければドアをボタン！と閉めても平気だし、周囲もとがめる様子はない。それからどんなに綺麗なバスルームでも共用だと誰かがシャワーを使ったあとシャワーじゃないところの床までびしょびしょにしてしまう。濡らさないように使うとか濡れたら拭いておくとかいう発想がないようだ。尤も宿の従業員はそういう場所を発見するとちゃんと拭いてくれる。

トイレットペーパーのホルダーは日本の物と大分形が違うのだが、これはよく注意しないとペーパーがホルダーのケースの内部で切れてしまつて次に引き出すのがとても大変になる。それを配慮して私はペーパーの垂れている部分の途中で切るようにするのだが同じようにしてくれる人はほとんどいない。尤も女性はそういうことに気配りするかもしれない。子供の世話などをしていると「ママー、紙が取れない！」と泣きつかれることもあるだろうから。

つまり欧米人は日本人などに比べると細かいことを気にせず服が汚れたり濡れたりもそんなに気にしないようである。それからイギリス人は食器を洗剤で洗った後すすがないという話を聞いたことがあるが、イギリス人かどうかは知らないが共同のキッチンでそういうことをしている人を見かけた。しかしどんなものを洗う時にも洗剤は必ず使う。私は水やお湯だけで落ちるだろうと思う時には使わないのだが……。思うに彼らは水よりも洗剤の方を信用しているのではないだろうか？日本人の生活よりも欧米人の生活の方が衣類や食器が油脂分にまみれる機会が多いのだろう。そうなる洗うのに洗剤は必須であり、逆に水で流せる程度の汚れの場合は洗わなくても気にならない？のかもしれない。

私は今回は登山ではないからということで舐めてかかっていい加減なザックを用いてしまった。そして衣類ごときにわざわざ新たな出費をする必要はないと考えて普段使っている衣類の中から軽くて使いまわしの出来そうなものを選んで揃えた。しかしそれが間違いのもとであった。

後から気が付いたのだが山に登る時の荷物と人里の町をつないで歩く旅の荷物との決定的な違いは「山の荷物はだんだん減って軽くなる」ということである。例えば日本の山に一週間入るとして20kgの荷物が必要だとし

たらその大半は食料と水なので使えば減るのだ。そして荷物は日に日に減少し下山するころにはおそらく10kg以下になっている。しかし後者の場合は食料は現地調達が基本なので、予め持参しているのは非常食や補助食品くらいなものである。だから使ったとしても大して軽くなるものではない。例えば初めの荷物が15kgだったとしたらそれは14kgになったり16kgになったりしながらという状態が最後まで続くわけだ。

それに食料以外のもののことを考えてみても山の場合より人里歩きの荷物のほうが必要なものが多い。衣服について言えば山に籠るときは行き帰りさえ見苦しくない格好をしていれば、山の中に於いては泥だらけであろうと汗まみれであろうと見ているのは仲間だけだから気にしなくてもいいし、第一洗濯をして乾かすなど川辺でキャンプでもするのでなければ初めから不可能なので期待していない。しかし後者の場合だと一応いつも汚くない格好をしていないと周囲に迷惑だしできれば洗濯もしたい。乾かなかった時のために予備も必要と考えるのでどのように節約してもやはり衣類はある程度必要になる。バスタオルやドライヤーは必要ないがフェスタオルの二枚ぐらいはないとどうしようもないし、シャンプーなども必要である。それから昔はなかった物だが今は携帯電話（スマホ）や充電器具も必要である。中には大きなタブレットを持って来ている人もいた。体力に余裕があればできることだ。

私は充電関係がちょっと多かった。アダプターはCタイプだけでいいのに何となく他のものも持ってきていたし充電の携帯ホルダーもなくてよかったのである。それからそのCタイプのアダプターを紛失してしまうことになったので予備に持っていた電池式の充電器と電池は役にたったが単三を二十本は多かった。十本でよかったのだ。ヘッドランプも必需品ではあったがこのごろは電池を使わないもっと小型のライトがあるに違いなかった。

それから薬だ。たまたま転んで足首を痛めたのでその後湿布薬が必要になり持参の四十八枚を全部使ってしまふことになったが、転びさえしなければこれも必要なかった。荷物が軽ければ転ばなかったかもしれないのである。不思議なことにほとんど筋肉痛にならなかったし足がつることもなかった。マメができたのも一回くらいだったので大量のカットバンもほとんど不要だった。不眠にもならず頭痛も歯痛も起きずそういうことに対する薬も不要だった。でもそれらのことはやってみなければわからないことであつたから仕方ないことではあつた。

それから私の場合ガイドブックや資料の類が多かった。他のカミーノたちはたいがい小さなガイドブック一冊（英語版のものは私も持っている）とスマホだけで対応していたのだと思う。私だって「スペイン」の分厚いガイドブックなど本当は持って行きたくなかつた。でも「必要なところだけコピー」とかよく言うが、どこが必要になるかわからないと思った。それにコピーだって十枚や二十枚になるとかなり嵩張るし管理も大変である。だから一冊丸ごと持っていく方がマシだと思った。

でもこれは東の果ての国から初めて行く私だからそうだったのであつてもし二回目に同じことをやるとしたらもう「丸ごと」不要になる。自分で三年間調べて作ったノートも不要。欧米人たちと同様にコンパクトなガイドブック一冊で足りるようになる。もう様子がよくわかってしまったから。

ヨーロッパの鉄道で列車がどのホームに来るのが発車の二十分前ぐらいになるまで告知されないのは、日本の鉄道に比べて列車の運行の感覚が長く、駅のホームの数がそれほど多くなく、時には線路も単線だったりしてその中で発着をやりくりしているかららしい。一応どの列車がどのホームに到着するかはあらかじめ決まっているのだが、予定外のことが起こったり列車運行の感覚が比較的短い時などに乗客の乗り間違いを防ぐためもある

のだろう。・・・そんなことを待ち時間のあいだ私はずっと考えていた。

サンティアゴ・デ・コンポステーラ駅からコルーニャという駅まで行き、そこからマドリード行きの寝台列車は出発する。コルーニャ駅の待合所は小劇場のように椅子が並んでいるが吹きっさらしである。そして乗車する前に空港でやるような手荷物の赤外線検査があった。へえ～。

乗車して自分のコンパートメントを探すが見つげにくい。車掌さんに番号を確認してもらおう。そして「そこは違う」と言われる。そして「こっちです。」と案内されたところはその隣の部屋のベッドの上段。この番号でどうしてここなのかわからん、と思いながらも指示に従うが、この部屋に後から他の乗客が来る予定があるかと聞くと、今のところないという。それなら上段だろうが下段だろうがどのベッドを使ったって構わないじゃないか。しかも「部屋の鍵はちゃんと閉めて寝るように」と注意された。それならますます私がどのベッドを使ったのかわかりやしないわけだ。まさか下車した後に「違うベッドを使ったな？」ととがめられるわけではないだろう、というわけで私は下段を使う。昇降の必要がないほうがいいにきまっているじゃないか。

しかし寝台車に乗るといつも私は眠れない。ベッドは快適だし身体は楽なのにそれでも眠れない。二年前にドイツのミュンヘンからフランスのパリまで寝台車に乗ったがその時もなぜかほとんど眠れなかった。「枕が変わると・・・」というヤツだろうか？

5月28日(土)

朝9:25の予定よりも十五分も早くマドリードのチャマルティーン駅に着く。日本人はチャマルティーンと言うと「マ」にアクセントを置いて発音したくなるがそれは違うようだ。列車のアナウンスでは「ティ」のところにアクセントがあった。

そしてまず「スペイン」のガイドブックのチャマルティーン駅の案内図にあったコインロッカーに行って荷物を預けてみる。そこはとても物々しい雰囲気のところであった。屈強な警官のような係員がいて、手持ちのものは全部チェック。空港や寝台車の時と同じである。

ロッカーの大きさには大中小があり、でも全体的に大きいので私の荷物は「小」のロッカーに充分収まる。料金は3.1€。ちなみに日本を出発する前に品川駅で利用したロッカーは「大」のにしかならず、しかも料金は700円もした。ともあれ強そうな係員がガードしてくれているというのはとても安心なことだ。

次に日本で予約しておいたホテルの場所を確認しに外に出る。ところがこれがどうしても見つからない。駅からすぐ近いはずなのに二時間も同じ場所をぐるぐると巡り歩くはめになる。心を落ち着けるために途中パールで休憩する。チュロスとカフェ・コン・レチェで1.6€。ケチっている場合ではない。必要経費である。しかしそのあといろいろな人に尋ねまくりながら放浪した挙句、そのホテルは駅にくっついているホテルのことだとわかった。ホテルの名前と場所が少し変わっていたのだ。あんまりだ！でもこれでもうこの先行きたい場所が見つけれなくても大したことじゃないという気分になる。なにしろ今夜泊まる場所があるんだから。

もう歩く気はしない。バスに乗って「プエルタ・デル・ソル」のあたりまで行き、日本料理店「どん底」を探すことにする。5番のバスに乗り、渋滞もあって約一時間後それらしきところの近く(?)で降ろされる。そこ

の現在地がよくわからなかったがうろうろしているうちに何となくわかってくる。そして別のバスに乗り換え二つ先の停留所の近くにプエルタ・デル・ソルがあった。そこでまた現在地確認に奔走。アルカラ通りの「セビージャ」の近くにいることがわかり、間もなく「どん底」にたどり着く。ここはガイドブックで調べて、良さそうだ、行ってみたいと考えていた店である。



「どん底」の刺身定食

「こんにちは」「いらっしゃいませ」と言われてとても落ち着く。何も緊張しなくていいというのはいいもんだなあ。そこでお刺身定食18€を注文。海外で、とあれば納得のお値段である。しかし「飲み物は？」と聞かれ麦茶をセレクトしたら2€。そんなに取るのか・・・とってしまった。でも久しぶりの日本食はおいしかった。食べ終わったら雨が降り出してしばし雨宿り。二十分くらいしたら小やみになったので外に出て、来るときに見かけた食料品店で果物とクラッカーと土産品を買う。14€と少しだったが端数はおまけしてくれた。

帰りのバスを確認しておいたのだからそれに乗ってホテルに戻る。今度は乗り換えなしだった。16:00過ぎにチャマルティーンに着く。バス代、行きは1.5€×2、帰りは1.5€。一回乗ると遠くても近くても1.5€らしい。(ウノ・スィンクエンタという。覚えてしまった。ついでに「次のバス停」というのは「プロクシマ・パラダ」という。)

コインロッカーに荷物を受け取りに行く。また荷物検査である。買った食料品も全部だ。厳重ですこと！そしてやっとホテルに入る。16:50であった。

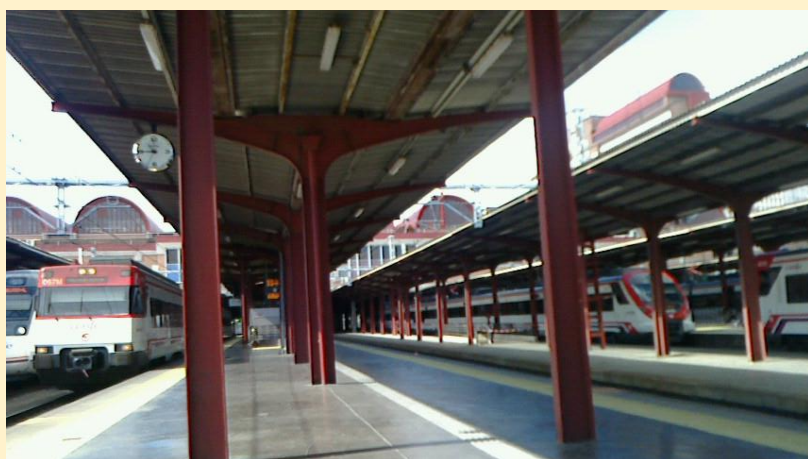
マドリードは大々々都会だ。道路は広い、建物は巨大だ。そして土曜日だったせいもあり街には人があふれていた。とにかく広すぎ、全てのサイズが巨大すぎて自分が今どこにいるのかを把握するのが難しい。広い道路が縦横無尽に走っていてどこがメインなのか分りにくく、地図のどこと街のどこが対応するのかなかなかわからない。(地図が小さいからですね。) 5月5日にパンプローナをすごく大きな町だ、まるで首都みたいだと思ったが比べ物にならない。マドリードに比べたら東京の大手町だって銀座だって小ぢんまりとしていて可愛いし、パリも通りは広いがなぜかマドリードほどには印象的ではなかった。パリの方が雰囲気は渋いのかも。もしない。

【夫へのメールから】

5月28日(土)(現地時間) 16:54

電池切れだったので連絡が遅れました。今ホテルに入りました。あの後バスに乗って日本料理店に行ってお刺身定食を食べてきました。一回くらい経験を、と思って行ったのですが落ち着きますねえ、いいもんですねえ、何も緊張しなくてよくて。もう十分にいろいろ頑張ったので明日は何もしません。ギリギリまでホテルにいてあとは空港に行ってお土産の補充をしたり周囲のウォッチングをしたりしています。フライトの時間の長さに比べたらそのくらいの時間を過ごすのはどうってことありませんから。ではおやすみなさい。

5月29日(日) 11:59 (マドリード、バラハス空港で)



バラハス空港に向かう電車の乗車ホーム

搭乗手続きはまだまだ先ですがあまりすることもなさそうです。おとなしく待っています。妙なことに、お土産でかなり重くなったザックですがパッキングがバランス良く出来上がり、背負うのがそんなに苦ではありません。あまり長時間はだめですが。中身の内容によって調整が難しくなるのかもしれませんが、これはまことに奥の深い問題です。

同 22:10

今パリのシャルルドゴール空港にいます。あと一時間半で出発ですね。

5月30日(月)(日本時間) 19:30 (羽田空港で)

30分発の大宮行きバスを待っているところです。(送信したのはバスが発車してから)五分ほど前に、今まで

精いっぱい頑張ってくれた18・8€のザックが力尽きて壊れ、背負えなくなってしまいました。大宮からはタクシーに乗ります。

【追記】

◎ザックが、羽田からのバスに乗る直前に壊れた。本当である。ブチブチッと音をたてて肩のベルトが切れて運べなくなりワゴンを借りてバス乗り場まで運ぶことになった。本当に、ザックも頑張ったんだねえ。

◎負傷した左足首の件である。帰国後数日して整形外科に行った。自然に治りそうな気もしたがいつまでも変ではあった。歩くのには問題ないがジャンプはできないのである。医師も首をかしげたが「時間はかかるが治るでしょう」ということだった。実際に三か月ほどたったら痛みは完全に消えていた。首が痛くなる症状は帰国後一週間ぐらいで消えた。

◎この旅により、かなりウェイトダウンしたようだった。「服が全部ゆるゆるになった」と言ったら友人が「それは三、四キロは減っているよ。」と言った。でも私はまだ体重測定はしていない。予想より大きい数字が出るのがいやだからである。でも帰ったらまた体重はすぐに戻るのだらうと思っていたが、帰国後三か月たった現在、「ゆるゆる」はまだそのままである。

(完)